佑啓

ゆ　う　け　い

発　行　者
社会福祉法人　佑啓会
理事長　里見　吉英
〒290-0265
千葉県市原市今富 1110 - 1
TEL　0436-36-7611
FAX　0436-36-7612
編集者　広報委員会

千倉とパンと私

長尾　篤

「しぜん工房を開所しパンを始める。松尾(現・ふる里学舎船橋施設長)と長尾にやってもらう」と理事長から言われました。二十五年前の話です。

当時、生活係に所属しており、長尾が異動するという話が出回り、送別会を開いてくれ、プレゼントにエプロンとミトンをもらいました。身も心もパンに向かっていましたが、待てど暮らせど「パンの修行に行ってこい」その一言を聞くことはなく、ん？ん？ん？とすでにパン屋で修行している松尾に会うたびに、そのうち行くよと話をしていたのですが、その年に私がパンをやることはありませんでした。

その数年後、東京の作業所が開所するから「在原と長尾で行ってこい」理事長から話がでました。いよいよ我々は東京に進出か。在原さん、東京に行ったら沢山見る場所も行きたい場所もあるから、お金がいくらあっても足りませんね。パンはすっかり忘れていました。毎日外食かぁ…しかし、正式に東京への異動の話はなく、時間が経つにつれ、あれだけ盛り上がっていた東京での豪遊話はでなくなりました。

しかし、ついに理事長から正式な異動の話がありました。「長尾和田浦に行け」でした。その時、ハッとしました。そういえば最近、妙に和田浦への同行が多かった気がする。えっ‼あれは伏線だったのか…

和田浦に異動した時、佑啓会で働き十二年が経っていました。和田浦の職員とは、理事長のかばん持ちで何度も顔をだしていたし、市原で一緒に働いていた後輩もいました。しかし、いざ異動し仕事をしていくと、「何をすればよいのか」「何が正解か」「利用者はどんな人か」「職員とどのように話をすれば良いのか」と、疑問だらけ。私は一か月間、休憩を自分の車に戻って取っていました。その時の気持ちは忘れられません。いくら年数を重ねても溶け込むまでには、葛藤や不安が多いのだと気づくことができました。この経験は、本当に貴重で、新しく職員が千倉に配属になった際は、精一杯歓迎し、これでもかと思うくらい迎え入れようと考えるようになりました。

そして現在、私が所属する千倉はオープンして十年目になります。和田浦・千倉の食事に出るパンは一週間に三回、市原から通勤している職員が運搬しています。運搬の調整上、焼き立てを昼食で食べる機会は一回、それ以外は翌日の朝食用でした。理事長は運搬の大変さがあることと、パン食の人気はあるが、焼き立てを食べさてあげられないことに悩んでいました。「千倉にパン工房を作るぞ」土地の購入に向けて、理事長、山口部長と、区長や町会役員との話し合いを三、四回ほど重ねる中で地域からのお話がありました。

「パンが好きで食べたいが、近所にパン屋がありません。館山まで買いに行っています」それを聞いてから、理事長の思いが単に利用者の食事にとどまらなくなりました。

「何か物件を探そう。千倉から近くて、広い場所。そして地域の方が買い物に来られるような店舗型にすれば、おいしいパンが食べられる」物件が出るたびに理事長と見に行きますが、なかなか条件に見合うものが見つからず、土地探しで一年ほどかかりました。ようやく見つかり購入しましたが、とにかく広い。建物を建てても三分の一くらいしか使用せず、残りはとりあえず駐車場にしようと設計が進んでいきました。私は、市原・和田浦・千倉と三か所の事業所で勤務しましたが、土地の購入・設計士とのやり取り、業者との打ち合わせなどというものに立ち会ったことがありません。何もかもが初体験なのでした。

次はだれがパンをやるか…その話が出るたびに悩みました。同期と飲む機会もあり相談しますが、あいつらはとにかく酷い。一緒に考えているふりをするだけ。畜生と思いながら、相談は千倉の職員にしようと決めました。

ふる里学舎パン工房オープン

建築は予定通り進んでいき、土地にアスファルトが敷き詰められ、建物の基礎ができ、棟上げが行われ、毎日、嬉しくて工事の進捗を見守りました。「おい、しっかりきれいに作ってくれよ」と、独り言を言いながら…

当初、このパン工房は和田浦と千倉、そして要望があった地域向けのパン屋だと思っていました。理事長と食事をした時に、なぜ、パン工房の名前が「ふる里学舎パン工房」にしたのか疑問に思い質問をしました。「このパン工房は、法人で初めてのパン屋である。この先、児童施設や、障害者の通所施設も法人で増えていくと思う。その施設で同じように店舗型のパン工房を作っていきたいんだよ。その際の店舗型のモデルになり、二号店、三号店と増やすんだよ」それが答えでした。

確かにふる里学舎千倉の児童は能力的に高く、卒業後はグループホームで生活し、本人が希望すればパン工房で働くことができる。たくさんの可能性を秘めている。その可能性が開かれるように今後展開したいとの話でした。

このパン工房は、その理事長の熱意や、児童の可能性に応えるために、しっかりとした体制を作り上げる必要があると感じています。改めて「パン屋」に対する思いがより強くなりました。理事長にご馳走になったお寿司の味を、この日は覚えていません…

四月五日「ふる里学舎パン工房」がオープンしました。五日前の房日新聞にオープンの広告を掲載し、反響を期待しました。開店は九時からでしたが、店舗の外にはすでに行列ができ、駐車場は満車になりました。そればかりか駐車場に入る為の渋滞も発生しました。九時から十六時まで営業する予定でしたが、十二時前にはすべて完売してしまいました。嬉しい悲鳴です。

地域の方々で賑わう様子

パン工房オープンに向け、店長(奈良)は一年間市原にパン作りの修行をし、副店長(鵜野)は木更津に泊まり込みました。市原のパン科で働いている利用者さんに声をかけ千倉に来てもらいました。さらに、各事業所のパン製造経験者が交代で毎日来てくれました。佑啓会って素晴らしい。

オープンして二か月が経ちますが、パン工房を楽しみにしていた地元の方が毎日のように顔を出してくれています。「安くておいしいからファンになったよ」と言ってくださる方もいます。敷地の三分の二が駐車場でこんなに広くてどうするのだろうと、悩んでいましたが、今となってはこの駐車場さえ狭く感じるほどです。

ご来店お待ちしております♪

パン工房をオープンしたことで、嬉しい出来事がありました。あるお客さんから電話がありました。「初日にパンを買いに行きました。販売スタッフや、パンを作っていた方々はとても忙しそうなのに、皆さん楽しそうに働いていました。それを見て、私もここで働きたいと思いました。ぜひ働かせてください」とのことでした。千倉の職員って本当にすごい。あんなに忙しくてバタバタしていても、明るい雰囲気で仕事ができているのです。パン工房は、順調に地域の中に少しずつ溶け込んできています。私たちは地域の中で育ててもらいました。その恵まれた環境をこれからも大切にしていくことが必要だと感じています。理事長がやれる範囲で一生懸命仕事しろ。さぼらないでと口癖のように職員に言います。私たちはこれからも、一生懸命努力し続けたいと思います。

（ふる里学舎千倉　施設長）

五月の空に願いを込めて

松尾　球太

青空を泳ぐ鯉のぼりの下では子どもたちの楽しげな声が飛びかう。「ふる里学舎船橋」での初めての行事として、子どもたちと職員がバーベキューを楽しんだ。みんなで鉄板を囲み、肉や野菜を頬張る姿を眺めながら、「やっとここまで来た」と安堵の気持ちがこみ上げた。

令和七年四月、「ふる里学舎船橋」が開所。障害児入所施設、短期入所（児童）、グループホーム、短期入所（成人）の四事業の運営を開始した。これまで障害児入所施設は「ふる里学舎千倉」と「ふる里学舎蔵波青年寮」で各二十名定員で運営していた。しかし、社会的養護を必要とする児童は常に満床の状況にあり、新たな施設の必要性が高まっていた。こうした背景を受け、里見理事長が令和元年に船橋市で整備を計画。施設の立地が八千代市との境界にあることから、開発協議に想定以上の時間を要し、一部地域からの反対意見にも直面した。それでも「子どもたちが安心して過ごせる場をつくりたい」という強い思いのもと、行政や関係機関との調整を重ねながら準備を進めてきた。

隣接するグループホームは、障害児入所施設の課題である、行き場のない加齢児をつくらない為の準備である。児童から成人へ、ライフステージに沿った一体的な支援を目指し計画した。

施設の整備は令和元年からスタート。法人全体で土地の竹刈りや草刈り、植栽などを職員の手で行った。昨年春からは円滑に準備を進めるため、五名のプロジェクトチームを結成し、県・船橋市・教育委員会・児童相談所・特別支援学校と打ち合わせを重ねた。船橋市は佑啓会として初めての地域であったため、手探り状態であったが、各機関の皆様に温かく対応していただき、感謝の気持ちでいっぱいである。十二月からは、ふる里学舎千倉・ふる里学舎蔵波青年寮の児童入所経験者五名もプロジェクトメンバーに加わり、備品整備、体制づくり、面談を行った。

こうした日々を経て迎えた開所。現在、障害児入所施設では五歳から十五歳までの児童十名を受け入れ、そのうち九名が船橋市立船橋特別支援学校へ元気に通学している。

満開の桜がお出迎え

また、グループホームには六名の利用者が生活し、近隣の法人内事業所「ふる里学舎八千代」「ふる里学舎高津」に通いながら、パン作りや受注作業に取り組んでいる。実際に働きに行く姿を間近で見ることができるのも、子どもたちにとって貴重な学びの場となっている。

バーベキューもお開き、だが子どもたちの笑い声は尽きることなく広がっている。空では鯉のぼりも泳いでいる。子どもたちもあの鯉のようにいつまでも元気に大空を泳ぎ続けられるよう、私たちが風となって支えていきたいと思った。そんな五月の空は青くどこまでも続いていた。

（ふる里学舎船橋　施設長）

ふる里学舎キッズガーデン

藤田　真

ふる里学舎キッズガーデンが、四月一日に市原市で二か所目となる児童発達支援センターとして開所しました。そして四月三日には、利用者二十三名を迎え、ご家族と職員合わせて総勢六十八名での入園式が行われました。

「入園おめでとうございます！」

祝福の声が響く中、あいにくの雨模様ではありましたが、ふる里学舎園芸科が制作した生花や、職員お手製の装飾・看板が園内を明るい雰囲気で満たしました。入園式では、一人ひとり名前を呼ばれ元気に返事をして立ち上がる子や、恥ずかしそうに手を上げる子が見られ、その初々しく可愛らしい姿が今でも脳裏に焼き付いています。

期待と緊張の入園式

市原市は、人口約二十六万人に対し、これまでは三和発達支援センターの一か所しかなく、障害を持つ子どもたちやその保護者を充分に支援できないという課題がありました。この状況を受け、二か所目の児童発達支援センターの必要性が議論され始めたのが、令和五年六月のことです。その後、市原市児童発達支援センター整備事業者募集に応募し、同年八月には佑啓会が整備事業者として選出されました。そして、令和七年四月の開所を目指し、具体的な準備がスタートしました。五井駅から徒歩十五分、市原の中心部に位置するふる里学舎五井を改修する計画。子どもたちが活動しやすいように工夫を凝らした建物にするため、設計事務所、施工業者、そして里見理事長、中村施設長とともに幾度も打ち合わせを重ね、準備が進められました。

建物の目処が立ち、令和六年十二月にはいよいよ子どもたちの募集が始まりました。建物は完成しても利用者が集まらないのではないかと心配もありましたが、佑啓会が運営するという期待の声が多く寄せられ、最終的に二十三名の子どもたちとその保護者が希望してくれました。建物がまだ完成していない段階にもかかわらず、これほど多くの方々に響いたのは、佑啓会の子どもたちに対する理念と、これまでの事業実績が評価された結果だと改めて実感することができました。

私事になりますが、私は佑啓会に入職して今年で二十年目になります。これまでは知的障害を持つ成人利用者や、重症心身障害児者、身体障害者の方々の支援に携わってきました。そして、平成二十五年四月にふる里学舎五井で放課後等デイサービス事業所の運営が開始されてからは、十二年間子どもたちと関わらせていただいています。成人の利用者との関わりも楽しかったですが、子どもたちとの関わりもまた格別で、とにかく可愛いと感じています。「一緒にどれだけ楽しめるか」を自身のテーマとしてこれまで取り組んできましたが、これからもこの気持ちを忘れずに子どもたちと楽しく過ごしていきたいと思います。実は私の母も保育士として働いていたことがあり、私が子どもたちと関わることを楽しいと感じる気持ちは、親の血がそうさせているのかもしれません。こうして子供たちに囲まれて過ごしている姿を、母も喜んでくれていることと思います。

入園式から一か月が経ち、当初はそわそわしていた子どもたちも、お部屋や新しいお友達、そして職員にも慣れてきて、楽しそうに過ごしている姿が多く見られるようになりました。職員もいかに子どもたちが楽しく過ごしてもらえるかを一生懸命考え、日々の支援に取り組んでいます。可愛らしい子どもたち、理念に共感し、佑啓会を選んでくださった保護者の皆様、そして子どもたちのことを心から愛している職員に囲まれて働けることを、私は本当に幸せだと感じています。

これからも佑啓会の理念である「楽しく、のびのびと」をモットーに、大好きな子どもたち、保護者の皆様、職員とともに、ふる里学舎キッズガーデンで過ごしていきたいと思います。ぜひ、お近くにお越しの際は、お気軽にお立ち寄りください。子どもたちの可愛らしい声がみなさんをお待ちしています。

（ふる里学舎五井　主任）

佑Tube

障害福祉で働く職員のリアルを発信！
２週間に１度動画を公開中。
是非、ご覧ください。

～編集後記～

令和七年度が始まり、早くも三か月が経とうとしています。

本号では新たに開所した三つの事業所の雰囲気をご紹介しています。お近くにお越しの際は、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

また、新規事業のスタートとともに、四十五名のフレッシュな新人職員が新たに仲間入りしました。初々しい姿が職場に新たな風を運んでくれています。今後の成長がとても楽しみです。

活気に満ちたふる里学舎より、心を込めて佑啓一三二号をお届けします。

（支援員　栗川克明）